

正当恧麼時の章（垂直正中線脱落）

恧麼の道理なるゆへに、尽地に万象百草あり、一草一象おのおの尽地にあることを参学すべし。かくのごとくの往来は、修行の発足なり。到恧麼の田地のとき、すなはち一草一象なり、会象不会象なり、会草不会草なり。正当恧麼時のみなるがゆへに、有時みな尽時なり、有草有象ともに時なり。時々の時に尽有尽界あるなり。しばらくいまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし

本章は、「蓋時」・「仏の時間と凡夫の時間」・「身心脱落」各章の内容を、具体的に垂直正中線脱落の用語もって、悟りの論理的全体構造を明らかにする。禅師が自らの悟りの体験を説明する序章にあたる。

垂直正中線脱落とは仏性巻の「当観」全体を論理的に説明するため造語したものである。正中とは片寄らない、又は、蔵身・調和・円融・即、の意味である。線とは、無形の無限領域世界を垂直線で表したものだ。

第三仏性巻の当観とは第一編で説明したように「能観（主観、自己）・所観（客観、他己）」にかかわらずのことである。当観なるがゆへに、不自観（即、正中、不自己）不他観（即、正中、不他己）である。この、不主観不客観・不自不他の二見から脱落した、当観の境地の全体を、正中と私は表示することにしたのである。

私たちの認識領域を超えた、真実相の基本原理を表現するためシンボリックに正中線を例えたのである。時空線軸、直線、直下、のことであり、脱落は解脱と貫通のこと。垂直正中線脱落とは、身心脱落の体験の世界を論理的な観点をもって、悟りの全体構造を論理化するために造語をしたものである。自己の存在と宇宙との相関構造が明確化しやすくなると考えたからだ。

本章は、凡夫が認識体験できる論理的領域の世界と脱落した直観的無限領域世界の二つの世界を開示する序文にあたる。直観と論理の関係である。次章の正中線脱落章は本文をより具体的に解脱の直観的世界の明確化をはかる。

「恧麼の道理なるゆへに、尽地に万象百草あり、一草一象おのおの尽地あることを参学すべし。かくのごとくの往来は、修行の発足なり」

恧麼（いんも）の意味は多様な内容が含まれている。これ、この物、真実相の当体を表す指示語である。ここは、指示する言葉と代名詞の、二つが円融した言葉と考えるべきである。恧麼、かくの如く・このような意。この道理とは前文の延長であるから、自己も蓋時、尽宇宙の存在物の各々も、独立無伴の蓋時の意味である。尽地、全地上の一切である。万象とは全宇宙の一切の存在物、百草とは、それらが林立する個々のこと

であり、一草一象、一本の草の全草におのおの尽地あることを参学すべし。個、個、尽地とは、今、現に、そこに、咲きつつある一本の花が蓋時の顕在であり、一本の野草も蓋時である。

「到恁麼の田地のとき、すなはち一草一象なり、会象不会象なり、会草不会草なり」

到恁麼、かくのごとく到る時、田地とは身心脱落した仏の解脱の境地から、客観の一本の草全体と一切の森羅万象との円融を明らかにする。当に脱落した時節には、自己が尽宇宙世界と円融蔵身し円転してしまう。また万象が自己を覆いつくすと同時に一体挿入し宇宙大となり転円してしまう。自己が全宇宙を吞却することと、全宇宙が自己を吐却する境地の二つがある。ここは微妙な表現内容なので、列車の例えで説明してみよう。

走行する列車内の自己全体存在の「主観・舟」と、ガラス窓の「客観・岸」の全風景をイメージする。本文は前章の身心脱落章で説かれた内容であるから、脱落した、われこれをみるなりの延長文である。

到恁麼の田地だから解脱した観点である。それゆえに、座席に座る自己と客観の風景世界の、万象、百草、一草、のことだ。主と客の二つの間を隔てていたガラス窓が直下脱落する。

その時節、「空間」(a)・「風景」(b)・「去来」(c)・「自己の身心」(d)・「列車の進行」(e)・「レール」(f)が、無限の一本の垂直正中線上〈永遠〉(a b c d e f)に蔵身し、脱落と同時に分離した二つの世界が鎖殞してしまう。

有時本文の、我逢人(d e f a b c f)、人逢人(a b c)、我逢我、(d e)出逢出(d)と同意である。我逢人の、「我」とは自己、主、舟、「人」とは尽虚空、尽大地、岸、他己、宇宙、万象、一草、のことである。

到恁麼の田地とは、最後の出逢出である。ガラス窓が落下脱落貫通すると、一草一象なり、人逢人の境地であり、自己が一本の草全体であり、万象全体に成りきるころ。そして、成りきってしまった境地が、次の会象不会象であり、会草不会草である。

列車の喩話で明らかにすると、見る自己と立ち現われている窓の外の山々や草木のことである。主観の我は風景を眺めている。この時、見る自己が我であり、見られる客観の山々は人である。即が逢である。我逢人の二つの分離関係はガラス窓が突然脱落すると、我の見る自己と人の見られる紅葉の山々を分離させていた、「即」が脱落することによって、自己・窓枠・ガラス・風景の一切の世界の分別が亡じてしまう。

禪師は「見仏」巻で、二つの時空世界の脱落時をこのように説かれている。「いまの見諸相と見非相と、透脱せる体達なり」の、見ると・見られる世界の意識が、無となり脱落しまう。この境地が到恁麼の田地である。

『聞書』はこのように説明する。「自己骨髓に脱落ならしむへし、自己の山河尽界に透脱ならしむへしと云う時こそ、のこる所もなけれ、是を参学仏祖の行季といふ」と、

自己と山河大地の脱落の境地をこのように述べている。

一草一象とは、尽宇宙世界の尽存在物である、山々・木々・花・草の一個一物である。虚空、万象、大地、露柱灯籠、張三李四の各々である、百草が風景に溶け込んでしまつて、自己の意識が脱落し万象が自己、一本の草が自分である。言句を超えた境地の世界が、会象不会象会草不会草のことである。説似一物即不中である。本章で道元は解脱した境地から、自己と万象のありようを説いているのだ。

「正当恁麼時のみなるがゆへに、有時みな尽時なり、有草有象ともに時なり。時時の時に尽有尽界あるなり。しばらくいまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし」

正当恁麼時とは、巻頭の蓋時・正当恁麼時の各章と対応する内容である。身心脱落した、正にそのような當時節、解脱した時、仏が正法眼より当に観たとき、自己並びに宇宙一切を眺めてみると、有時高々峯頂立であり～有時大地虚空である。高々峯頂立深々海底行が自己の全体、三頭八臂～大地虚空が尽宇宙のことである。

正当恁麼時のみなるがゆへに、解脱した正法眼から当に観るとき、有時はみな尽時なり。有時とは、自己も宇宙の一切が有時ではあるけれども、尽時は蓋時のことである。唯の時ではなく、蓋時（a b c d e f）一文字に一切が蔵身した時節と理解すべきである。

それゆえに、高々峯頂立の自己、三頭、丈六、拄杖、露柱、張三、李四、虚空、大地、一切が蓋時なのである。有時は尽時なり、尽時とは時で尽宇宙が尽くされているのだから、蓋時なのだ。有草有象ともに時なり、有だから空間、存在論であるから、一本草の存在、万象の一切の存在はともに時なり、蓋時なりである。

「時々の時に尽有尽界あるなり」

時々とは、蓋時である刹那時の全体相だから、尽有である全存在が尽界であり、全宇宙が蓋時に蔵身され、一刹那時・一刹那時と理解すべきである。前後際断した、刹那生滅の全体であり、一刹那時の起が円転・滅が転円することである。

時々とは、一刹那時の瞬起時・瞬滅時である。時々の時に尽有尽界あるなり。蓋時の身心全体なのだから、刹那時の自己全身で全宇宙が蓋い尽くされているのである。蓋とは、覆うであるから、自己の時で全宇宙が蓋い尽くされ、尽十方が自己の時で、尽過去尽未来が極め尽くされているのだ。

ここを、経豪『御抄』「正当恁麼時のみなるがゆへに、有時皆尽時也とは、此の有時の道理が、始中終にもかかはらず、尽界有時の外に、交はるものなく、有時独立のすがたを云なり、ゆへに有時皆尽時也と云うはるるなり」と、このように述べている。

「しばらくいまの時にもれたる尽有尽界ありやなしやと観想すべし」

しばし、いまの時に今の意味は凡夫の今ではなく、仏位の当時のことである。それ故に自己が蓋時なのだから、自己の時間の世界のほかに、他に宇宙も時間も空間もあろうはずがない。

しかし、凡夫は自己の存在が宇宙世界の中の微細な一部分の自己であると思う。自身の外にも、尽有尽界である、他に宇宙世界が存在するものと信じる。そうではなく、自己の存在を無くして、世界も存在物も時間も成立しない。自己が宇宙であり、蓋時その物であるからだ。此処がポイントである。禪師はよく参学し参究してみるべきであると説かれる。